

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その20

文：井上 ^{ただし} 忠さん

地域を支えた「^ご^か^{そん}^{ぜき}五ヶ村堰」物語

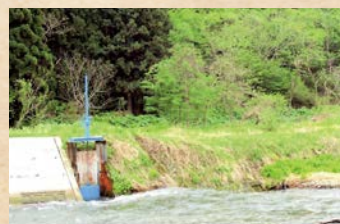
縄文時代後期に始まったとされる稲作は、弥生時代には区画や水路が整備されてきたといわれています。奥川の地域もこれと時を同じくして稲作が発展したと想像されます。「大堰」ともいわれる「五ヶ村堰」の開鑿時期は、江戸時代初期の延宝7年(1673)に作成された「^{かいさく}吉田組堰堤御改帳^{よしだぐみせきつみおんあらためちよう}」に記載があることから、それ以前であることは間違いありません。小屋集落内の奥川左岸を取水口とし、新町集落南までの5^き畝余りを流れ、およそ30町歩の水田を潤してきました。「幅3尺、深さ3尺」というこの堰の水は、生活用水としても活用され、沿線に住む家庭では、鍋釜を洗い、風呂水として汲み、野良着の洗濯などにも利用し、とても重要な存在だったのです。また、中町集落にあった小中学校では多くの子どもたちの飲料水として使われ、さらに防火用水としての役割も大きなものがありました。この堰周辺の集落は、飯豊山を源流とする奥川のつくった河岸段丘上にあり、地下水が乏しく、開発や生活はこの堰への依存度が非常に高かったのです。

今ではこの堰に関わる小屋・宮野・真ヶ沢・中町・新町の5集落が代表者をもって委員会を組織し、毎年“堰上げ”や“堰草刈り”を行うなど管理・保全に努めています。

このように地域住民と大きな結び付きをもって大切にされてきた堰も、400年の歴史を経た今、人口減少と農業離れ・農地の耕作放棄を前に大きな試練の時期を迎えています。地域を支えてきた歴史あるこの堰の流れが止まる日が来ないことを願うばかりです。



↑取水した水が流れる五ヶ村堰



↑小屋集落内の取水口付近



今月の表紙

今月の表紙は、平成29年11月19日に撮影した昨年の初雪です。今年の初雪を今か今かとカメラ片手に待ちわびていたのですが、残念ながら12月号には間に合いませんでした。この広報紙が皆さんのお手元に届くころには、雪の便りも届いているでしょうか。

編集後記

今月号の「まちの話題」にも掲載しましたが、毎年この季節は、町内各所のそばまつりにおじゃまし、取材しながら名人の皆さんが打ったおいしいそばを堪能させてもらっています。数年前に橋屋のそば打ち講習会に参加して打ち方を教わりましたが、自分でもやるとなると準備から片付けまで大仕事。毎年年末になると祖父母から「祐一が打ったそば、食ってみっちな」と言われますが、今年はちよつと…。来年頑張ります…。

そばは食べる専門 長谷川祐一